

『慶陵』(1953年刊)の契丹語研究

—体系的研究の嚆矢として—

吉池孝一

1. 序言

清格爾泰 2002 は契丹小字の研究を3期に分ける。1期は三・四十年代で、字義の推測を主とする段階。2期は五・六十年代で、字音の推定について様々な方法が試みられる段階。3期は七・八十年代で、契丹文字研究小組によって契丹語中の借用漢語を利用し契丹小字(原字)の音価推定が飛躍的に進んだ段階。『慶陵』(田村實造・小林行雄著。上巻は1953年刊)の契丹語研究については、2期の字音推定の試みの一つとする。しかしながら本稿は、『慶陵』の契丹語研究の真価は字音の推定にあるのではなく、①契丹語の文法を解明しようとしたところにあること及び②体系的な観点からの研究手法(体系的研究)が用いられたところにあるとする。各期を通じて個別的研究で実証的な観点からの研究(個別的研究)が主流であったが、『慶陵』の契丹語研究は体系的研究の嚆矢として研究史に位置付けることができるのである。

2. 個別的研究と体系的研究

ここでいう個別的研究とは資料の比較対照により実証的に不明な部分を解明する手法である。契丹文字資料の解読にあつて、対応する漢文により契丹語の語義を推定したり対応する漢語音により契丹文字の音価を推定したりすることがこれに相当する。3期の契丹文字研究小組による契丹語中の借用漢語を利用した契丹小字(原字)の音価の推定は、個別的研究の集大成ともいえよう。他方の体系的研究とは何か。文であれ、語であれ、音韻であれ、また文字であっても、一定の単位が示差的な面と示同的な面によって結び付き体系をなしている<sup>1</sup>。部分は孤立しているわけではない。体系からみて、資料の欠けている部分を推定したり判明している部分を再解釈したりすることが、ここでいう体系的な研究である。もっとも個別的研究と体系的研究を截然と区別するのは困難である。しかしながら、そのどちらに重きを置いているかという判断は不可能ではない。

1、2、3期は個別的研究が主であったが体系的研究とよべるものもあつた。3期の契丹文

---

<sup>1</sup> 示差的小および示同的という用語は有坂秀世 1940 によつた。日本語の音韻/p/と/b/は声帯振動の有無によつて互いに区別される。これが音韻の示差的な働きである。また音韻/p/と/b/は両唇の閉鎖を本質的属性とする点において同類と感ずる。これが示同的な働きである。以上は同書 96-97 頁による。なお、文字の場合は恣意的な部分があり張りつめた体系というよりもやや緩やかな組織と表現した方が適當であるかもしれない。

字研究小組による研究は、1977年に「關於契丹小字研究」として世に問われ1985年に『契丹小字研究』として結実したわけであるが、個別研究と体系的な研究より成っていると私は判断する。個別研究は契丹語中の借用漢語を利用した契丹小字(原字)の音価の推定であり契丹文字研究小組による研究の主要な部分をなす。他方の体系的な研究は個別研究によって知れた契丹小字の音価を基礎としたものである。契丹語の語幹と接尾語の組み合わせから母音調和の存在を仮定し、既知の語幹の母音音価から未知の接尾語の母音音価を推定したり、陽性(男性)母音と陰性(女性)母音がペアとなる接尾語にあつては互いを参照して音価を推定したりするというものである。この研究は清格爾泰1992などのその後の一連の研究に発展する。このように、個別研究が主流である中にも体系的な研究はある。そして私は、『慶陵』(1953年刊)の契丹語研究を、より具体的には、当該書に挟みこまれた「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」(小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製。「接尾語表」と略称する)を体系的な研究の嚆矢として契丹語の研究史のなかに位置づけ得ると考えている。

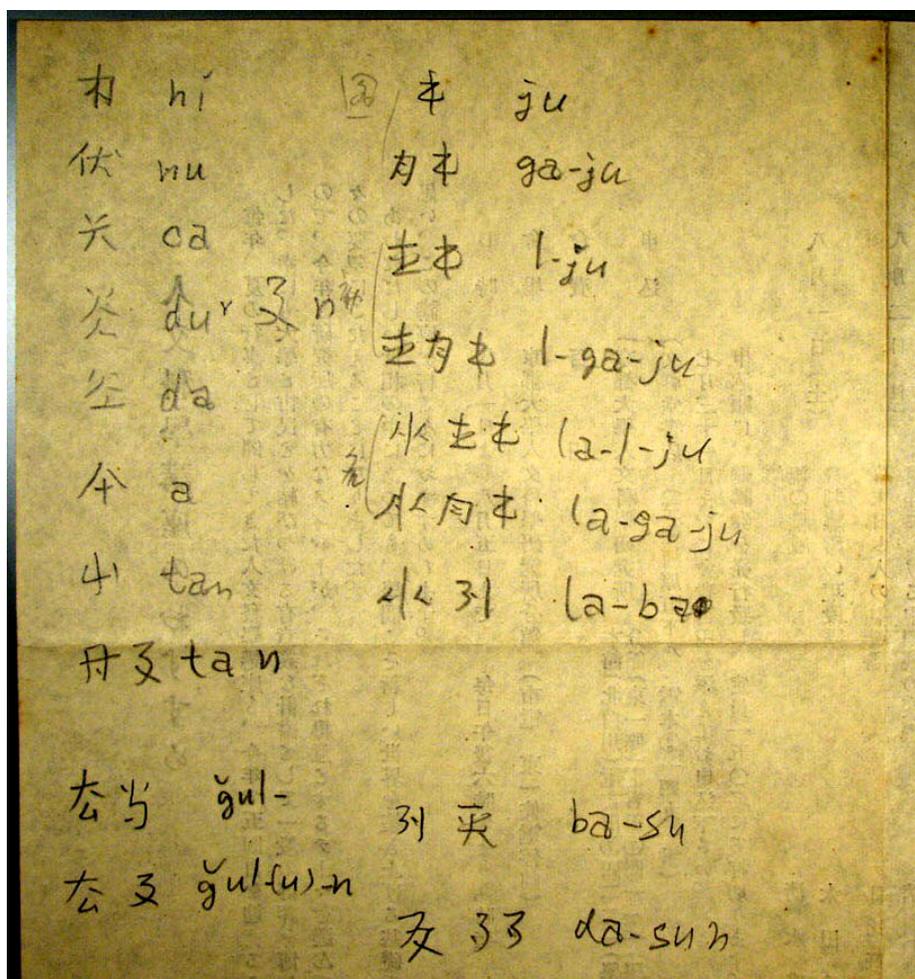
### 3. 『慶陵』本文中の語構成法についての記述

『慶陵』の上巻「第四節契丹文字の哀冊」に興味深い記述がある。“組みあわされた契丹文字には、その語尾の一原字ないし四個の原字が、名詞の格および動詞、形容詞などの接尾語を示す表音文字からなる場合がふくまれていることがあきらかになった(註13)。これによって、われわれの行った接尾語識別の結果を示せば、別表のとおりである。”(263頁)。引用文中の註13は次のとおり。“語根に接尾語がつけられている場合に、その接尾語の前半の部分が、語根の品詞をかえるためのものである例もかなり多くみとめられる。”(270頁)。本文中の“別表のとおりである”とするところの“別表”とは『慶陵』に付された「接尾語表」である。これらの記述のうち、註13が興味深い。“語根の品詞をかえるためのもの”とは何かということにつき『慶陵』にはこれ以上の説明もなければ例を示すこともない。ただ、名詞語根に何らかの成分を付して動詞としたり、動詞語根に何らかの成分を付して名詞としたりするなど、モンゴル語をはじめアルタイ諸語に見られる語構成法が契丹語にも見られることを述べていることはわかる。また品詞を変換する付加成分が接尾語の前半部分であるというから具体的な語例を想定していたこともわかるが、残念ながら『慶陵』の記述からはこれ以上のことは知り得ない。しかしながら、この記述に対応する語構成の具体例が長田夏樹氏(2010年1月逝去)の遺品の中から発見された。「接尾語備忘録」である<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 「接尾語備忘録」及び『慶陵』本文の記述との関連については吉池孝一2012a, 2012c参照。

#### 4. 接尾語備忘録

長田夏樹氏逝去の後契丹語研究に係わるノートやメモなどが発見され<sup>3</sup>、その一部についてこれまで『KOTONOHA』などで紹介をさせていただいた。紹介した資料のなかに「接尾語備忘録」と命名したメモ書きがある。これは『慶陵』（1953年3月刊行）に付された「接尾語表」の一部を抜き書きしたものである。このメモは「人文科学講座のおすすめ」（京都大学人文科学研究所人文学会主催、昭和28年（1953年）8月開催）という案内のウラに鉛筆で書かれたものであるから1953年8月前後のものとして大過ない。筆跡は長田先生のものである。



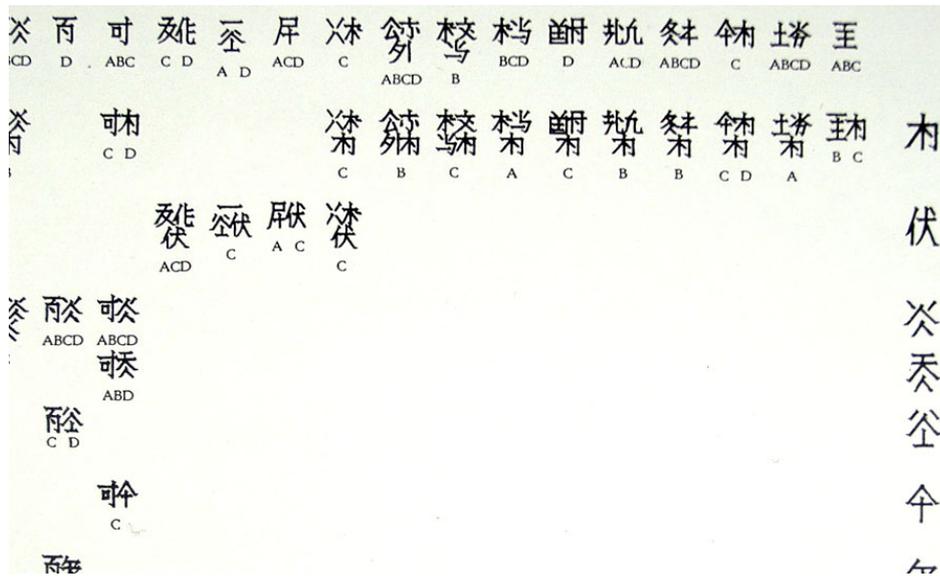
いま中央部分を翻字すると次のようになる。なお理解の便宜のため“名”の後の接尾語の **木** と **木** に四角(□)を付す<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 平成23年1月末、故長田夏樹先生の契丹語と女真語の研究に係わるノートやカードなどを長田家よりお寄せいただいた。

<sup>4</sup> 契丹小字フォントは内モンゴル大学の契丹文字再研究課題組と内モンゴル蒙科立軟件有



「接尾語表」(1)の右上部分を写真で示すと次のとおり。



上の写真にあるように契丹小字は原字と呼ばれる表音文字成分をハングルのように左右上下に組み合わせて表記されるが、本稿では便宜的な措置として左から右に一行に記すことにした。なお、小字の下の ABCD は表を作製するに際して利用した 4 つの資料(A 興宗哀冊、B 仁懿皇后哀冊、C 道宗哀冊、D 宣懿皇后哀冊)である。

さて、「接尾語表」(1)をご覧ください。最上段の **王**、**土券**、**今木** は単独で出現する語幹部分である。単独で出現しない語幹は原表では空欄となっているが略図では「無し」とした。「無し」の下の **五峇** という語幹は単独では出現しないということである。単独で出現するものとししないものの両者あわせて語幹は 162 となる。「接尾語表」(1)の右端に、縦に並んでいる **木**、**伏**、**々** は接尾語である。「接尾語表」中の第 1 番目の接尾語 **木** は属格語尾であり、数ある接尾語の内、唯一その機能が『慶陵』の本文中に明示されている。機能が確実にわかっている接尾語 **木** を座標軸として表の最初に置き、この語尾が付されたものを名詞語幹あるいは名詞的語幹として配置し「接尾語表」を構成したとこの表の性格を概括することができる<sup>7</sup>。なお、同じ接尾語が「接尾語表」(2)の左端にも並んでいるが、こちらには音価が付されているものがある<sup>8</sup>。接尾語の総数は 49 にのぼる。

<sup>7</sup> この点については吉池孝一 2011a 参照。

<sup>8</sup> 24 の契丹原字に音価が付されている。公表された 24 の音価以外にも推定がなされたものがあるらしく、『慶陵』本文で“現在われわれの推定している原字の音価の詳細は、さらに今後の検討と研究をかさねた上で発表することにした。”(265 頁)と未発表の原字音価の存在に言及する。これについては不明であったが、長田夏樹氏逝去後、残された資料の中からそれと思しき表が発見された。その表では 43 の契丹原字に音価が付されている。吉

## 6. 語幹と接尾語の間に出現する原字

「接尾語表」を上から下に縦に見ていくと、同一の語幹の下に異なる形式の語幹を収める部分があることに気づく。例えば語幹の第 73 の下には先ず単独で出現する語幹(あるいは語根。以下全て語幹と称する)として **田** を収め、次いで接尾語が付いた語幹として **田中** と **田** の 2 種を収める。接尾語は **接尾語** のように四角(□)で括って提示する。本来の語幹と接尾語の間に出てくる原字は **原字** のように下線を付す。

第 73 **田**—**田中****付又**—**田中****付伏**—**田中****凡**

**中** のような語幹の一部を形成する原字には、他にどのようなものがあり、それぞれ何回使用されるかを調査すると次のとおりである。**中** 1a (25 回)、**井** (11 回)、**谷** da (10 回)、**立** gul (4 回)、**尺** (2 回)、**化** (2 回)、**力** ga (2 回)、**谷** 1 (1 回)、**平** (1 回)、**又** ñ (1 回)、**亦** (1 回)。同一の語幹の下に異なる成分を含む語幹を配置していることからみて、本表の作者は接尾語の異なりに応じて語幹と接尾語の間に一定の付加成分を付すというアルタイ語に見られる語構成法を想定していたとして大過ない。斯界においては当初より契丹語はアルタイ語系統の言語と認識されていた。そうではあっても、語幹と付加成分と接尾語を具体的に想定していたらしいという点については、解説が緒に就いたばかりの 50 年代初期にあってみれば特筆すべきことといわねばならない<sup>9</sup>。

## 7. 接尾語中の交替可能な原字

「接尾語表」を右から左に横に見ていくと、同一の接尾語の下に異なる形式の接尾語を収めている部分があることに気づく。例えば接尾語の第 18 **谷北** を横に見ていくと、語幹が **中平** と **中中** の場合は接尾語 **谷北** と結びつくけれども、語幹が **分卡** や **令平** となると接尾語 **尺北** と結びつく。語幹の異なりに応じて接尾語中の原字が **谷** から **尺** へと交替するかのような配列としている。接尾語は **接尾語** のように四角(□)で括って提示する。接尾語中の交替可能な原字は **原字** のように下線を付す。

第 18 **谷北** : **中平****谷北**—**中中****谷北**—**分卡****尺北**—**令平****尺北**

このような交替が可能に見える原字 **谷** ~ **尺** に着目して「接尾語表」を整理すると交替可能に見える原字は次のようになる。**谷** ~ **尺**、**中** 1a ~ **平** ~ **方** ~ **谷** da、**又** da ~ **井** ~ **尺**。本表の作者は同一の接尾語の欄の下に異なる原字を含む接尾語を配置していることからみて、語

---

池 2011b 参照。

<sup>9</sup> 本 6 節および次 7 節の内容については「関與契丹小字後綴表(『慶陵』1953 年刊)」と題し契丹文字及相關領域研討会(於:内蒙古大学。2012.7.17—2012.7.20。本報告は 7.19)にて資料を配布し報告した。

幹の異なりに応じて交替可能な原字のグループを想定していたとして大過ない。なお、1992年に公表された清格爾泰氏の論文「契丹小字中的動詞付加成分」と見比べることによりその先見性を明らかにすることができる。清格爾泰 1992 は動詞の付加成分として **𐰺** l、**𐰽** ul、**𐰻** al のグループと **𐰸** u、**𐰾** u、**𐰺** u / iu のグループを挙げる。その推定音価をみると、語幹との間の母音調和にしたがって母音の音価を異にするが、機能を異にする 2 つのグループに分けている。このグループ分けは「接尾語表」から帰納したグループ分けと一致する。後代の研究成果によって「接尾語表」の学術的な価値を証することができたわけである。

## 8. 結語

本「接尾語表」の作者は、興宗哀冊・仁懿皇后哀冊・道宗哀冊・宣懿皇后哀冊から語幹と接尾語の組合せを一単位として網羅的に抽出し、それを示差的な面と示同的な面により配列することによって語構成法と接尾語の用法の体系を示した。そしてこの表には仕掛けが施されている。表を縦に見た場合、同一語幹の下に異なる成分を含む語幹を配置する部分がある。例えば“**𐰽** (語幹) — **𐰽****𐰺****𐰾** — **𐰽****𐰺****𐰾** — **𐰽****𐰺**”。これを語幹の**𐰽**と3種の語尾**𐰾**・**𐰾**・**𐰺**の間に付加成分として**𐰺**が出現し得るという観点からの配置とみなすことができる。表を横に見た場合、同一接尾語の下に異なる原字を含む接尾語を配置する部分がある。例えば“**𐰾** (語尾) : **𐰽****𐰺****𐰾** — **𐰽****𐰺****𐰾** — **𐰽****𐰺****𐰾** — **𐰽****𐰺****𐰾**”。4種の語幹**𐰽**・**𐰽**・**𐰽**・**𐰽**に接尾語の**𐰾**が付されるという構成になっているわけであるが、**𐰾**を**𐰺**に交替した接尾語**𐰾**を同一の欄に配置する。これを**𐰾**と**𐰺**が同一の機能を有するという観点からの配置とみなすことができる。これらの配置は、語構成法と接尾語の用法を体系的に提示しその体系からみた解釈に基づく仕掛けである。

以上を要するに、「接尾語表」は契丹語の文法を解明しようとした体系的研究の成果であり、研究史においては体系的研究の嚆矢として位置づけることができる。その後この研究は、契丹文字研究小組による研究中の体系的研究に繋がっていったのである。しかしながら、表中の仕掛けについては言うまでもなく表自体についても十分に説明がなされなかったため「接尾語表」は正当な評価を受けず今日に至ったといえよう。なお「接尾語表」中の第1番目の接尾語**𐰾**は属格語尾であり、接尾語の総数49の内、唯一その機能が『慶陵』の本文中に明示されている。機能が確実にわかっている接尾語**𐰾**を座標軸として表の最初に置き、この語尾が付されたものを名詞語幹あるいは名詞的語幹として配置し「接尾語表」を構成したとこの表の性格を概括することができることは先に述べた。そこで接尾語**𐰾**を属格語尾とすることについては、先行する厲鼎燿 1932 の個別的研究に負う所が大であるこ

とは強調されねばならない<sup>10</sup>。体系的研究は個別的研究の支えによって成り立つのである。最後に蛇足ながら一言したい。現在にあっても契丹文字で書かれた契丹語の解読はその途上にあるが個別的な知識は飛躍的に増加している。そこで思うに、その知識を利用した体系的な研究の占める割合を意図的に高めるべく研究を進める段階となっているのではなかろうか。その意味で体系的研究を比較的得意とする土壌を持つ日本や欧米から次の研究が出てくることを期待し得る時期でもある。

〈参考文献(発行年順)〉

- 厲鼎焯 1932. 「熱河契丹國書碑考」, 『国學季刊』第3卷4号, 563-572頁。
- 有坂秀世 1940. 『音韻論』東京:三省堂。
- 田村實造・小林行雄 1952-53. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は1953年。
- 中国社会科学院民族研究所・内蒙古大学蒙古語文研究室契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『内蒙古大学学报』1977年第4期契丹小字研究專号。
- 長田夏樹 1984. 「契丹語解読方法論序説」, 『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49頁。『長田夏樹論述集(下)』(京都:ナカニシヤ出版、2001年)に再録。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社。
- 清格尔泰 1992. 「契丹小字中の動詞附加成分」, 『民族語文』1992年第2期:1-9頁。
- 清格爾泰 2002. 『契丹小字釋読問題』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 吉池孝一 2011a. 「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」, 『KOTONOHA 百号記念論集』古代文字資料館, 90-107頁。
- 吉池孝一 2011b. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど 一契丹原字音価表一」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第105号, 19-26頁。
- 吉池孝一 2012a. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど 一接尾語表備忘録一」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第110号:1-8頁, 2012年1月。
- 吉池孝一 2012b. 「關於長田夏樹先生遺留的契丹小字解読工作的資料」, 『契丹学国際學術研討会會議論文集』中国赤峰(赤峰市人民政府、内蒙古博物館、中国社会科学院民族学与人類学研究所、赤峰学院):327-335頁, 2012年8月。
- 吉池孝一 2012c. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど 一「接尾語備忘録」の挙例と『慶陵』の記述一」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第118号:1-4頁, 2012年9月。

<sup>10</sup> 長田夏樹 1984 は厲鼎焯 1932 の執筆年を 1933 年 11 月と考証する。未解読文字の解読において、重要な位置を占める論文が実際に何時書かれたかということは小さな問題ではなく、可能な限り正確を期さなければならないが、今は当該論文の奥付の発行年にしたがう。